

町史のひとこま

(第二十二回)

須恵の眼科医

③

長崎で学んだ蘭学

須恵の眼科医の祖は高場順世という人物で、天草にいた頃ポルトガル・スペイン系のいわゆる南蛮流医学を学び、その技術をもって須恵に移り住んだものと想像されます。

これは十七世紀半ば頃のことでしたが、幕末になると上須恵村の田原養全、須恵村の岡正節の二人の眼科医（福岡藩医）が藩命によって長崎に留学し、西洋医学を学んでいます。長崎は当時世界に向けて開けられた唯一の窓で、しかも貿易相手国は中国を除けば西欧からはオランダ国だけという状態ですが、先進の学問を求めて優秀な人材が長崎に集まってきたのです。

有名なシーボルトはドイツ人の医師ですが、国籍をオランダといつわって長崎の出島に滞在し、日本について研究を進めながら鳴滝塾を開いて日本人の弟

子たちに西洋医学（医学だけではありませんが）を伝えたのでした。岡正節や田原養全が長崎へ行った頃は、シーボルトはすでに日本を追放されていたため直接シーボルトに学んだわけはありませんが、後任の長崎オランダ商館の医師や、シーボルトの流れをくむ日本人に学んだのでした。

岡正節の遊学

岡家は代々正節を名乗っていますが、幕末の正節はのちに松節と名を改めています。嘉永元年（一八四八）家業をつぎ、安政元年（一八五四、ペリー来航の翌年）に長崎に遊学（留学の意）しオランダ人について医学を学んだのでした。

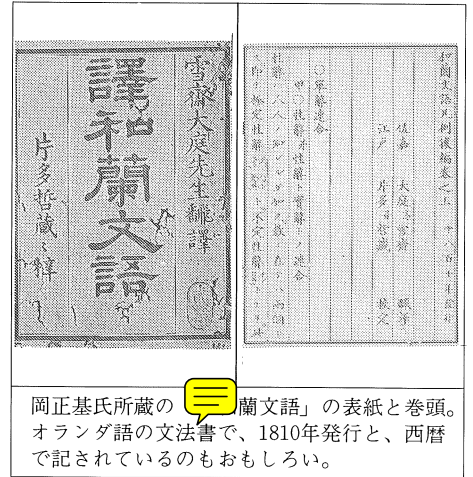
福岡藩主黒田長溥は「蘭癖」と称されたほど蘭学に理解のある人で、長溥の先代斉清もシーボルトと博物学の話をしたという学識のある大名でした。こうしたこともあって長溥は、中洲に精煉所を設置し、須恵焼にも化学的な知識でうわ薬を作らせるなど、西洋技術の導入に力を尽くし、第一回の藩費留学生として長崎に行った人々の中に岡正節（当時二十五歳）も加わっていたのでした。なお、この時共に遊学した人に古川俊平がいますが、この人は長崎で化学を学び、筑前での写真術の元祖となりました。

田原養全の遊学

田原家は代々養全・養朴・養柏のいづれかを名乗っています。ここで取り上げる養全は幕末から明治中期頃までは養柏と称し、晩年養全と改めたもののようです。長崎ではボードインについて医学を学んだと伝えられています。養全は思わぬ事件で中断されます。養全は慶応三年（一八六七）長崎に滞在中丸山での英国水兵殺害事件に遭遇し、この事件の犯人グループの一人として取り調べをうけることになったからです。

事件が起きたのは慶応三年七月六日のことで、酔っぱらいの英国水兵二人を福岡藩の長崎留學生で、すでに学者としても期待されていた金子才吉が斬ったのでした。金子はただちに切腹して責任をとりませんが、福岡藩は関わりをおそれてこれを隠し英国と幕府の間で国際問題にまで発展していきます。とぼつちりをうけたのが当時長崎にいた土佐藩の海援隊。こんな乱暴なことをするのは海援隊だろうとさんざんに疑われたのでした。

（町誌編集委員会事務局石瀧）



岡正基氏所蔵の「蘭文語」の表紙と巻頭。オランダ語の文法書で、1810年発行と、西暦で記されているのもおもしろい。

